アイヌ口承文芸テキスト集１
白沢ナベ口述　狼から逃れた娘

採録・訳・註　中川裕

ここに紹介するアイヌ口承文芸のテキストは、１９８８年6月２０日に千歳市蘭越の故白沢ナベ氏の御自宅において、筆者が氏から録音したウエペケレであり（整理番号：N8806201.UP)、１９９９年度千葉大学文学部日本文化学科の「アイヌ語学演習」という私の授業で教材として使ったものである。

授業では用いられる単語の一覧表と録音テープのみを受講者に渡し、それを聞き起こしてきたものを順次黒板に書いてもらって添削するという方式をとった。自分自身ではだいぶ前に聞き起こしてあったものだが、約四ヶ月かけて一語づつ説明しながら受講者と一緒にあらためて聞き取りを行ってみると、自分が聞き誤っていたところや、解釈の違っていたところ、どう説明してよいものやらわからないところなどが色々あることに気が付いた。再考の過程を経、聞き取りとしては一応完了したものとなったので、授業で行った注釈の一部を付して公開することにする。

白沢氏についてはいまさら紹介するまでもないと思われるが、１９０５年6月7日（戸籍上は１９０６年３月１５日)、現在の千歳市蘭越（旧ウサクマイ）で小山田サンレキテ氏とアンマタン氏（旧姓千船）の間に生まれる。齢７０を過ぎてから千歳という地域を越えて広く世間に、数々の口承文芸の伝承者としてその名を知られるようになり、またその膨大な知識と卓抜な言語説明能力により、アイヌ語を学ぶ多くの人々にとって理想の教師として活躍した。その功績により１９８８年には北海道文化財功労者賞を受けている。拙著『アイヌ語千歳方言辞典』(1995、草風館）も、その記述の大部分を白沢氏の教示に負っている。残念ながら１９９３年１０月２１日に忽然とこの世を去られてしまったが、その遺産である数々の記録は、氏が晩年をそれに注ぎ込んだアイヌ語を後世に伝えるという仕事に、現在でも役立てられ続けている。

表記について

本稿のアイヌ語表記は、原則的に『アイヌ語千歳方言辞典』で用いているものと同じであるが、一部、特別な表記法を用いているので明記しておく。

or_ ta のように下線が引いてある場合は、その下線の直前の音が音素交替を起こしていることを示す。どのような音に交替しているかは後続の音との関係から自動的に推測できるので、交替する前の形（いわば辞書の見出し語の形）で示しておく。すなわち、or_ ta という表記は、実際には ot ta と発音されることになる。なお、ekimatek y_akun などの例は、y が落ちて、ekimatekakun のように発音されることを示す。これはコンピュータ上でアイヌ語のテキストを処理する関係で生み出された表記法であり、正書法に取り込むというような必要はないものだが、便利なので利用することにする。

rews(i)のように( )でくくったものは、本来そこにあることが期待される音が発音されていないことを示す。語末で無声化などが行われている場合、一応上記のケースとは区別して、この表記で示す。

yakka <ka>のように、< >でくくったものは、次の語句を考える際に、今語った語句の最後の音節などを繰り返す、白沢氏の言語運用上のクセとも言えるものである。これに関しては佐藤知己（2000）「アイヌ語千歳方言における反復による有音休止について」『道立アイヌ民族文化研究センター紀要』第6号で、詳しい考察がなされている。

a=etaye [kor] wa のように[ ]でくくったものは、直後に言い直しを行っていて、文章の解釈の上からは外してもよいと思われる部分を示す。

内容について

この話は姉であるアサ氏から聞いたということである。その姉さんという人は、「アイヌ語やアイヌの伝承を自分が残そうと思ったが、それはかないそうもない。伝えられるのはもうお前しかいないから」と常々白沢氏に言い続け、数々の物語を氏に語り聞かせたということである。

この物語はごく一般的なウエペケレの形式を持ちながら、内容的には、少なくとも私が見聞きしてきた中では非常に異質なものである。その異質さの最大の点はオオカミの描かれ方にある。オオカミ（horkew kamuy、wose kamuy）は、神々の中でもかなり格の

高いものとされており、クマなどの他の山の獣たちとは違い、天界に住んでいると描写されることが多い。シカなどの獲物を倒して、その肉を残していくことなどから、夫を亡くし、狩による食料を得るすべのない寡婦に、肉を授けてくれる神として讃えられている。

物語の中においては、オオカミは必ずといってよいほど人間の味方として登場する。あるときには人間を守るために悪神と戦って命を落とし、またある時には孤独な男のために自分の子供を犬として遣わして、後には人間の娘の姿にして妻として添わせる。およそオオカミが西洋の昔話のような悪役で登場する話は、アイヌの物語の中にはないといってよい。しかし、このウエペケレはその例外なのである。

ここに登場するオオカミはまるで人格を持ったものとしては描かれておらず、獣そのものとしての描写しかされていないといってよい。また通常のウエペケレであれば、人間を食い殺すといったような悪神はその後罰が当てられ、地獄に落とされたり、あるいはそれを逃れるために主人公の守護神となったりという展開になるのであるが、この話にはそれもない。まったく救いのないまま終わりになる。

その他の点においても、たとえばいつでも逃げだせるように主人公が行う周到な準備の様子など、この話は非常にリアリスティックな状況描写によって成り立っており、カムイという存在を通じて世界を解釈するというフィルターにかけずに、現実に起こった事件が素材のまま語られたような話である。それがこの物語を特異なものにしている点である。

白沢氏のウエペケレとしては比較的短い話（１２分３０秒）であるが、口承文芸的にも非常に興味深く、また当時のアイヌの人々の生活を知る上でも貴重なテキストであると考える。

本文

sino nispa, nispa hoku a=kor, kotan kor kur a=kor wa, a=hokuhu ekimne kor tup sumawe rep sumawe eawnarura. yuk ne yakka kamuy ne yakka <ka> pirka kamuy rupne kamuy patek eawnarura. cep koyki kor pirka cep patek koyki wa ek wa a=e wa, soy ta ka cise or_ ta ka kam kuma tay cep kuma tay osumtapes[1] kor oka=an. asinuma[2] arikiki=an pe ne kusu toyta=an w_a tu pu a=epuni re pu a=epuni[3] kor oka=an ruwe ne akusu <su>[4]

私は本当の長者、長者を夫にし、村長を夫にしていて、夫は山へ行くと二匹の獲物、三匹の獲物をとってくる。シカでもクマでも、立派なクマ大きなクマばかりをとってくる。魚をとると、よい魚ばかりをとってきて、私たちはそれを食べ、外にも家の中にも、肉の干し竿、魚の干し竿が油をしたたらせる。そういう暮らしを私たちはしていた。私も働き者なので、畑仕事をして、ふたつの倉を建て、みっつの倉を建てて暮らしていたところ

---

[1] 白沢氏自身の言葉を使えば、「油がにじんでたちたちと流れだしていること」。豊かな生活を送っていることを表す常套句。o「～の尻」sum「油」ta（強調）pes「～にそって下る」か？　家の中の干し竿というのは、囲炉裏の上に掛け渡して、薫製にしている状況を表す。

[2] ここで asinuma が使われているのは、ここまでは夫がいかに働き者であるかという話であったが、ここからは私の方の話だということを示すためである。「一方、私のことについて言えば」というような感じ。

[3] 白沢氏の物語にきわめてよく用いられる常套句。pu epuni は白沢氏の説明では「倉に作物を入れること」だということだが、puni「～を持ち上げる」の目的語が表面上に現れていない「作物」だとすると、epuni は e「＜場所＞に」puni「(作物）を持ち上げる」ということにでもなろうが、その場合は pu or epuni となるはずである。したがって pu「倉」e「～の頭」puni「～を持ち上げる」という解釈の方がより蓋然性が高い。「倉の頭を持ち上げる」とは、倉の屋根を柱の上に乗せることであり、すなわち「倉を建てる」ということだと考えられる。

[4] ウエペケレはこのように、まず自分達がどのような家族構成であり、どのような生活振りであるかを示す描写で始まる。それから sineantota「ある日」、sineanpata「ある年」などのような言葉で事件の始まりを示すのが、常套的な形式である。

sineanpata ne <ne> [cipo] turepta=an kusu, [cipo] kotan or un katkemat utar a=tura hine <ne>, a=inne-topaha cip ani turepta=an kusu pet turas(i) paye=an a paye=an a hine <ne>, a=hokuhu ekimne kucaha[5] hanke kuca[6] an pe ne wa, hanke kuca or_ ta paye=an hine <ne> [kim ta rews(i)]

"kim ta cipo nep a=kar yakka, ear atuhu[7] a=etaye wa, nep ka a=ekimatek[8] kor ear atuhu a=etaye [kor] wa, orowa osma wa kira=an pe ne na."

ある年、ウバユリを掘るために、村の奥さんたちを連れて、私たちは大勢で舟に乗り、ウバユリ掘りをするために川をのぼってずっと上がって行って、夫の狩用の小屋のうち、近くの狩小屋があるので、その近くの狩小屋に行った。

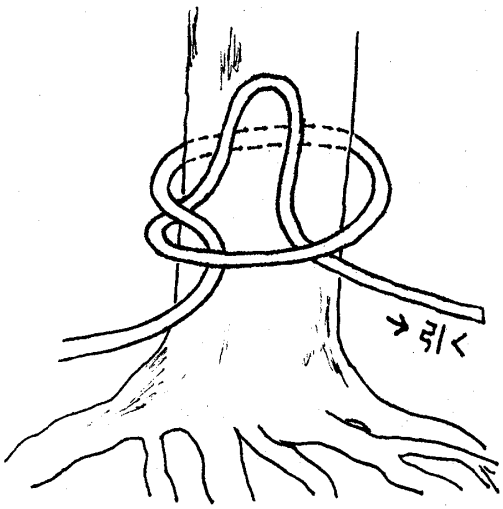
「山に舟で行った時は、何をするのでも、ひと巻の綱を引っ張って、何か緊急の事態が発生したなら、ひと巻の綱を引っ張って、（舟）に飛び込んで逃げるのだぞ」

---

[5] ここで kucaha という所属形の形を取っている理由は不明。似たような意味の cise「家」は、少なくとも日常会話やウエペケレの中では所属形をとることはない。kuca も所属形になっているのは私の資料ではこれ一例であり、似たような表現の kimun kuca or_ta「山の狩小屋で」（N9306011.UP）では、明らかに概念形が用いられている（所属形であれば＜場所＞として解釈され、kim un kuca ta となるはず）。

[6] kuca はひとりの人間が何ケ所かに用意しており、hanke kuca「近くの狩小屋」に対して、tuyma kuca「遠くの狩小屋」というものがある。

[7] ear atuhu とは、ear「ただひとつの」atuhu「～の綱」。その後で「いっかいむすみして」と日本語で言っているのが、この表現の訳だと思われる。舟をもやう時に、いわゆる「引き解け結び」の変型のようなやり方で、舟の方から引っ張ってもほどけないが、もう一方の端を引っ張ると簡単にほどけてしまうように結ぶやり方である。右図は白沢氏の実演を元に、筆者が図示したもの。



[8] ekimatek は普通「～に驚く、びっくりする」という訳がなされる語だが、その使役形の ekimatekka に「～に～を急がせる、せかせる」という用法があることからして、「何かしなければいけない緊急事態が起こってあわてふためく」というのが中心的な意味ではないかと考えられる。

sekor patek a=onaha i=pakasnu[9] kor oka=an pe ne kusu, iyotta horepasi[10] cip a=yanke hine, nep ka ekimatek y_akun, ear atuhu a=etaye sekor yaynu=an kusu neno いっかいむすみしておいたん、

してこんど yap=an w_a poro kuca ne kusu, oro ta inne topaha rewsi kuni mun-kerkeri so-kerkeri=an[11] w_a, orowa pirka cikuni a=ta wa, a=ta a a=ta a wa a=rura wa, orowa ... orowa cep a=ma[12] wa a=e kor, sirkunne ruwe ne hine <ne> ne cep a=ma imanit opitta humneanita a=siretarare. apeoy or_ ta a=siretarare wa a=anu hine

と、父からいつも教えられていたので、一番川下に舟を上げて、何か緊急事態が起こったら、ひと巻の綱を引っ張ろうと思うので、そのように一回結びしておいた。

そして私たちは岸に上がって、大きな狩小屋なものだから、大勢が泊まれるようにごみを掻き出し床を掃除して、それからよい木をたくさん切って運んできて、そして魚を焼いて食べていると、暗くなり、その魚を焼いた焼き串を全部一ケ所に刺した。炉に刺しておいて、

---

[9] pakasnu は「～を罰する」という意味でも使われるが、「～に教える」という意味にもなる。「～に～を教える」という時は epakasnu を用いる。本文の例と次の例を比較せよ。sekor an pe a=po-utari a=epakasnu kor「～ということを、子供たちに私は教えながら」（N8806202.UP）

[10] horepasi は通常「沖の方から」と訳されるが、舞台は山の中であり、ここでは「川下の方に」という意味であるのは明瞭である。これは、rep というのが具体的な海のある部分を指すのではなく、「山（陸）と反対の方」という方向を表す言葉であるということを示すよい例である。

[11] kerkeri は「～を削り取る」だが、ここでは炉縁のごみをひろったりするようなことで、要するに掃除のこと。

[12] 舟でやってきているのだから、鍋を持参して干し魚で ohaw「鍋物」でも作ればよいようなものだが、ここでは魚を焼いていることになっている。また、この話はここで焼き魚を食べるという設定でないと成立しない話ではある。しかし、村から保存用の魚を持参したとしても、生干しでもない限り焼いて食うのは難しい。一方、ウバユリ掘りに来ているのだから季節は初夏であることを考えると、生干しの魚を持って歩くというのも不自然である。女性だけのグループでもあり、魚捕りを行ったという描写もないのだが、ここは kuca の掃除をするかたわら、川で小魚をとって焼いたと考えるべきであろうか？

orowa iyotta apa kopak ta <ta> hotke=an[13] wa, eronne wa[14] a=tura katkemat utar a=hotkere hine, hotke=an ruwe ne awa, <wa> hemanta humi kosne p san humi as. cise okari apkas apkas humi a=nu wa <wa>,

"hemanta ene humi an h_i an?" sekor yaynu=an kor sikisattarara=an[15] w_a an=an akusu, poro horkew [siri] etuhu ninpaninpa[16] kane kor ahun hine <ne> みんな mokor [ekasu] ekasu etoro hawe mesramesra kor oka korka, asinuma anakne mokor=an ka somo ki no an=an pe ne kusu, <su> ene poro horkew ahun w_a, <ma> katkemat utar hurarakkar kor, ape okari omanan siri a=nukar akusu,

そして、私は一番戸口の方に寝て、上座の方に一緒に来た奥さんたちを寝かせて、横になったところ、何か軽い足音が山から降りてくる音がする。家のまわりを歩き回っている音がするので、

「あれは何の音だろう？」と思いながら、耳をそばだてていると、なんと大きなオオカミが鼻面を引きずりながら、入ってきて、みんなはぐっすり眠って、いびきの音をごうごうと立てていたのだけれど、私は眠りもしないでいたものだから、そのように大きなオオカミが入ってきて、奥さんたちの匂いをかぎながら、火のまわりを回っている様子を見ていると

---

[13] 白沢氏によると kuca の床はたぶん地面むきだしではなく、ござなどが敷いてある。寝るところには笹の葉などを敷く。冬ならアオキの葉を雪の上に敷いて寝る。父親は冬、kuca の中で鹿の皮を着て寝たが、その時毛の側を内側にしてはだめで、毛を外側にして着る。そうすると火も焚かなくてよいぐらい暖かいということだそうだ。

[14] この wa は、eronne が「右座」wa「から」のように格助詞と解釈されるべきではなく、esisoun wa「右座へ、右座で」の wa とおなじく、本来接続助詞であると思われる。すなわち、eronne は「右座へ行く」という動詞であり、eronne wa は「右座へ行って」という表現から、「右座に」という副詞的な形で使われるようになったと考える。

[15] si「自分の」kisar「耳」tarara。tarara は tari（hetari「頭をもたげる」等々）と語根を共有する語で、一方の端が固定されたものに関して、もう一方の端を持ち上げた状態におくことを表していると考えられる。

[16] ninpa は通常後ろにものをひきずる場合に使われるが、この場面は鼻を地面に近づけて匂いをかぎながらやってくることを表現している。

i=hurarakkar kusu i=enka ta etuhu turituri wa ek wa kusu, imanit a=esikari hine <ne> etupuyke a=sirkootke akusu, <su>

soyosma hine <ne> tan wose arukaykire[17]. wose akusu toan situ ka taan situ ka kasi un horkew ihawtasarepa hawe a=nu wa, katkemat utar [mososo ka ... a=mososo ka] a=mososo kor an=an ka emontapi[18] wa kusu, sine pon katkemat, iyotta a=ramuosma[19] pon katkemat tekpeci a=sikoetaye[20] a=ninpa wa, pet or_ ta hoyupu=an wa ran=an hine cip or un a=osura hine, orowa cip ear atuhu a=etaye wa orowano cipo[21] hoyupu=an.

わたしの匂いをかぐために、私の上に鼻づらをのばしてきたので、焼き串をひっつかんで、鼻の穴をおもいきり突き刺した。すると、

（オオカミは）表に飛び出して、何度も遠ぼえを繰り返した。遠ぼえすると、あっちの尾根からもこっちの尾根からも、オオカミが鳴き交わす声が聞こえてきて、奥さんたちを起こしている余裕もないので、ひとりの若い奥さん、一番仲良くしている若い奥さんの手を引っ張って、引きずっていって、川まで走って下りていき、舟の中に（その奥さんを）放り込んで、舟のひと巻の綱を引っ張って、舟を走らせた。

---

[17] arukaykire は白沢氏自身の説明では「苦しいもんだから一所懸命助けよぶに、ウォー、ウォーっていう言葉なんだ。いそがしくいう言葉」ということである。ar「非常に」u「互い」ka「～の上」iki「する」re「～させる」という解釈では、自動詞にしかならないので、ar「非常に」u「互い」kay「～をおぶう」ki「する」re「～させる」ということで、「～を何度も（互いに覆いかぶせるように）繰り返す」とでも解釈するか？

[18] emontapi は「余裕がなくて～に手が回らない」

[19] ramuosma は「～が気にいる、気にいってる」という意味だが、「好き」というような場合だけでなく、和人の殿様の所に交易にいったが、接待されてなかなか「帰る」と言い出せず、kamuytono <u>ramuosma</u> pakno turano oka=an「和人の殿様の<u>気がすむ</u>まで一緒にいた」（N9204191.KY）のような例もある。

[20] tekpet, -i は「手の指」だが、白沢氏によると、tekpeci sikoetaye というのは、手の指四本をそろえたのをつかんでひっぱることだという。

[21] cipo は本来「舟に乗る」という動詞だが、ここで副詞として使われている。

siyoka un inu=an hike, <ke> situ ka un [wose kuni p] [22] wose hawe nu kuni p ne episkanne wose hawe wen ruy hawe ne yakun[23],

"inne topaha uekarpa etokus hawe ne nankor." sekor yaynu=an kor orowano cipoyupu=an[24] w_a san=an ayne, tane anakne sir'ankes kane siran kor, a=kotanuhu tane hanke wa kusu orowano pewtanke=an kor san=an. cipoyupu=an w_a san=an. sirankes pe ne kusu tane mos kur ka okay pe ne kusu, "neun ne hawe ne ya?[25]" sekor hawas[26] kor, okkayo ka katkemat utar ka, "neun ne hawe ne ya?" sekor haweoka kor i=ekari pet or un hoyuppa.

後ろに聞き耳をたてると、尾根の上で（例の鼻を突き刺したオオカミの）遠ぼえを聞いたに違いないものたちが、まわりで激しく吠え立てているので、

「大勢の群れが集まって来るのであろう」と思って、舟を飛ばして下っていくうちに、もはや夜明け近くになってきた頃、私の村が近づいてきたので、ペウタンケしながら下がった。舟を走らせて下がった。夜明け近くなので、すでに目をさましている人もいたので、「何があったんだ？」と言いながら、男たちも女たちも「何があったんだ？」と言いながら、私に向かって、川の方に走ってきた。

---

[22] ここは、その後の「(鼻を突き刺された仲間の）遠ぼえの声を、山の上から聞きつけたに違いないもの」と言うつもりであったのだろうと考え、言い直しと判断した。

[23] **yakun** は「～ならば」と訳すのが普通であるが、ここのように「現実に～である。それならば～ということだ」という場面では、「～なので」と訳した方が適切な場合もある。

[24] **cipo hoyupu** という表現も出てきているのだが、**cipoyupu** はそれの縮まった形と見るべきではないようである。**ho**「尻」**yupu**「～を締める」＝「走る」という例から類推して、**cip**「舟」**o**「～の尻」**yupu** で、「舟を走らせる」という語構成の可能性が考えられる。

[25] 直訳は「どのようである声（話）なのか？」ということだが、右のように訳した。こういう表現を逆に日本語からアイヌ語に作文するのが、特に難しい。

[26] 『アイヌ語千歳方言辞典』で **hawas** が 1 項動詞となっているのは誤りである。**hawas** は 0 項動詞であって、主語をとらない。ここではすぐ後に出てくる **haweoka** と、その点でよい対照をなす例となっている。

"tapne kane tapne kane ne wa kusu, pon karkemat sinep[27] a=ninpa wa cip or a=ekatta wa orowano san=an. i=okake un [situ ka un wose] soyosma p wose p ne kusu situ ka un ne yakka kotor un ne yakka ihawtasarepa wa wose hawe a=nu ruwe ne wa, orowano <no> arkirane cipoyupu=an w_a katkemat sinep a=ekira wa san=an ruwe ne." sekor itak=an.

「これこれこういうわけで、若い奥さんひとりを引っ張って舟に放り込んで、下りて来ました。後ろで、表に飛び出したやつが遠ぼえしたので、尾根の上の方でも、斜面の方でも、鳴き交わして遠ぼえしている声が聞こえ、そこで一目散に舟を走らせて、奥さんひとりを連れて逃げて下りてきました」と私は話した。

orowano tan inne utar ikewehomsu[28] kor yap=an[29] hine, orowa isimne utarpa patek nitan kur patek pikan kur patek[30] uetunus[31] wa, inne topaha cipo paye wa inkar kusu cipo [paye wa] paye ruwe ne hine <ne>, orowa

すると、その大勢の人たちはイケウェホムスをし、私たちは岸に上がった。そして翌日、リーダー格の人ばかり、足が達者で動作の素早い人ばかりがふたりひと組になって、大勢で舟を出して、様子を見に舟で行って、そして

---

[27] 人間を数える数詞としては sinen「ひとり」があるが、sinep も使われる。敬意をあまり含まない場合に用いられると考えられる。

[28] ikewehomsu は、このように uepeker 中では凶事に合って生き延びた人間に対して行う儀礼として描かれることが多く、その場合はその凶事に合った人間に対する魔払いの儀礼と解されるが、それ以外にも様々な記述がなされており、明確な全体像をつかむことが難しい。川井麻紀が 1999 年度千葉大学文学研究科の修士論文「ukewehomsu（ウケウェホムス）とは何か～二谷国松氏の『死人のない火事の時の ukewehomsu』を資料に～」において、この儀礼について論じている。

[29] この時点で始めて舟から岸に上がっているわけで、「かくかくしかじか」という説明を村人たちにしている時は、まだ舟に乗っていることになる。ikewehomsu が魔払いの儀礼であるので、それをすまさないと舟から降りられないということを、ここに読み取れるだろうか？

[30] 白沢氏は nitan も pikan も「足が早い」という同じ意味の言葉だと説明するが、pikan には pikan sipine yaykokarkar「素早く身支度した」（N9306011.UP）のような用法もある。

[31] u「互い」e「～について」tun「ふたり」us「～につく」＝「ふたりひと組になる」。千歳地方では舟は普通ふたりひと組で乗るものであり、サケ漁などではひとりが舟を操舵し、もうひとりが marek で漁をする。

"inkar ruwe ne akusu, [pone takupi a=e] a=e pone takupi patek[32] okay ruwe ne." sekor kane haweoka kor sap ruwe ne wa,

orowaun [usa a=epi] poro su a=kor wa usa a=epi[33] turano <no> a=kuspa wa, a=inne-topaha paye=an hine <ne>, ne pone a=uomare wa, orowaun a=etusirkar[34] kusu paye=an hi ne kusu, usa a=epi a=supa wa a=kopunpa wa orowa <wa> a=etusirkar hine, <ne>

opitta etusirkar hine orowa hosippa=an ruwe ne korka, ney pak an=an yakka a=oyra ka niwkes [ruwe ne kor] ruwe ne korka

「見てみたところ、食べられて骨だけになり、それしか残っていなかった」と言いながら下りてきて、

そこで、私たちは大きな鍋を持って、色々な食べ物も一緒に運び、大勢で行って、その骨を集め、それから、供養をするために行ったのだから、色々な食べ物を料理して捧げ、そして供養して、

みんなを供養してから戻ってきたのだけれど、いつまでたっても忘れることができないのだけれど、

---

[32] takup, -i と patek は同じように「だけ、ばかり」と訳されている語だが、この場合は口調からしても言い直しているのではく、おそらく「狼に食べられて骨だけ（takupi）になっていて、それだけ（patek）が現場に残されているものだった」という意味であると考えられる。一般的には、takup, -i は「他のものが無くなってしまって、それだけ」という場合に用いられ、patek は「他の物もあるのだが、特にそれだけを選んで」という場合に用いられることが多い。

[33] aepi が aep「食べ物」の所属形だとすると、このように人称接辞を含む合成名詞が所属形をとる場合には、その人称接辞を除いた部分が語幹になり、そこに人称接辞があらためてつくということになる。つまり、a=aepi にはならないし、aepi が「彼らの食べ物」という三人称の意味になることもない（その場合は epi, -hi という表現になる）。aepi が ep という語の所属形だという解釈もできそうに思われるが、ep という形はアイヌ語の一般的な造語法の規則から外れた形であり、認めがたい。

[34] ここで e「～について」tusir「墓」kar「～を作る」と表現されている行為は、沙流地方の伝承で ohastuye という言葉で表されているものではないかと推測される。このように山などで変死した遺体は村へ下ろしてくることができず、その場で木の枝を切って覆い、その上を石などで押さえてとばないようにし、それを埋葬の代わりにする。それを o「～に向かって」has「枝」tuye「～を切る」と言う。

orowano anakne eun turepta h_i paye ka a=sitoma p ne kusu, nen ka turepta kusu payeka somo ki no oka=an ruwe ene an h_i ne korka, ney pak oka=an yakka tapne an pe aresikup[35] or_ ta a=kopepka[36] p a=oyra ka niwkes no ne korka,

それからというものは、ウバユリ掘りに行くのも恐ろしいので、どこにもウバユリ掘りにも行かないでいたのだが、いつまで経っても、若い頃こういうことでひどい目にあったということを、忘れることができずにいたけれど、

[37]toyta ka =an[38] poronno toyta=an pe ne kusu <su> tu pu ka a=epuni re pu ka a=epuni kor oka=an ruwe ne. a=hokuhu ekimne kor tup sumawe rura rep sumawe rura wa <wa>, cepkoyki yakka pirka cep patek koyki wa, soy ta ne yakka cise or_ ta ne yakka kam kuma tay cep kuma tay orasnacitke[39], osumtapes kor oka=an ruwe ne korka <ka>,

畑仕事をし、たくさん畑仕事をしたので、ふたつの倉、みっつの倉を立てて暮らした。夫は山に行くと二頭の獲物、三頭の獲物をとってきて、魚とりをしても、よい魚ばかりをとってきて、外にも家の中にも肉の掛け竿、魚の掛け竿が列をなして肉や魚をぶらさげ、油をしたたらせてて、（そのように幸福に）暮らしていたけれど、

---

[35] 実際には aresikup と発音しているのだが、白沢氏に聞き直すと「arsukup という言葉であり、若い頃、１７、８歳前後の年令を指すのだと思う」という説明を受けた。ということで『アイヌ語千歳方言辞典』には、arsukup の形の方しか示していないが、他の例でも aresikup の形が出てきており、aresikup も載せるべきであったと考えている。註４４参照。

[36] kopepka は「～というひどい目に合う」とも訳せるし、そうした体験「を苦労話として語る」とも訳せる。ここでは前者として訳しておくが、本文の最後の方に、後者の訳例も出てくる。註４７参照。

[37] ここからは、エンディングに入っていく。これはウエペケレにおける一般的な構造の一部であり、この部分を欠くものは時間的な理由で省略されてしまったか、あるいはウエペケレではないかのどちらかである。どの話でもだいたい同じような表現の連続になっているものだが、この話は純然たるハッピーエンドの話ではないので、少し他の話とは違う要素が入っている。

[38] これは、動詞と人称接辞（接尾辞）の間に副助詞が割り込んでいる表現であり、白沢氏の文章中に、まま見られる表現である。

[39] たくさん下がっているということ。沙流の木村きみ氏の表現中には、これとよく似た意味で orasitomne という言葉が使われる。

ene an pe aresikup or_ ta a=tomot wa orowa ney pak a=oyra humi ka isam no an katkemat a=ne kor,

ukopokor=an[40] w_a okkayo po ka a=kor, menoko po ka a=kor wa, a=poho-utari[41] a=pirkaresu a=tomteresu p ne kusu, rupne wa tunas[42] wa <wa>, [ekimne] a=hokuhu ekimne epakasnu. okkayo nepki ene oka hi epakasnu. menoko po anakne asinuma a=epakasnu kor oka=an ayne, <ne>

tane anakne <ne> kemapase katkemat nispa utar a=ne wa oka=an ruwe ne korka, a=poho utari rupne wa, orowano a=hokuhu ekimne kor ene piye yuk ne yakka kamuy ne yakka eawnarura hi neno ikipa p ne kusu, nep a=e rusuy ka nep a=kor_ rusuy ka somo ki.

あのようなことに若い頃出会って、いつまでも忘れることができずにいる女であり、

夫との間に子供ができて、男の子も、女の子も生まれ、子供たちを立派に大事に育てたので、すぐに大きくなり、夫が山仕事を教えた。男の仕事のやり方を教えた。女の子は私が（女の仕事を）教えて暮らしているうち、

もはや、年老いた夫婦になってしまったが、息子たちは大きくなると、夫が山へ行って肥えたシカやクマをとってきたのと同じように狩をしてくれるので、何を食べたいとも何を欲しいとも思わなかった。

---

[40] 直解すれば u「互い」ko「～とともに」po「子供」kor「～を持つ」だが、「一緒に子供を持つ」と訳してはおかしい。pokor という行為が複数の人間（この場合夫婦）の間で成立したということを表しているのであり、「ふたりの間に子供が生まれた」とすれば的確な訳になる。

[41] poho と utari は両方とも所属形になっているが、意味的には a=po-utari あるいは a=poho utar と同じことを表していると考えられる。

[42] 田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』には tunas の助動詞的用法として、poro tunas「早く大きくなる」などの例を挙げているが、白沢氏はその意味で wa tunas という表現を用いる。poro wa tunas「すぐに大きくなった」という用例もある。

a=kor matkaci utar rupne wa toyta p ne kusu, tu pu epunpa re pu epunpa[43] wa, nep a=e rusuy nep a=kor_ rusuy ka somo ki no okay nispa a=ne ruwe ne korka,

ney pakno an=an y_akka a=oyra ka niwkes pe, horkew e katkemat utar oyra ka niwkes no an pe a=ne ruwe ne ayne, tane anakne [kemapase=an w_a] kemapase=an pe ne kusu, tapne kane an pe arisukup[44] or_ ta kopepka katkemat a=ne ruwe ne katu a=poho-utari a=matnepo-utari a=epakasnu.

女の子たちも大きくなって畑仕事をするようになったので、ふたつの倉を建て、みっつの倉を建てて（そのおかげで）、私たちは何を食べたいとも何を欲しいとも思わない長者夫婦であったが、

いつまでたっても忘れることができず、オオカミに食べられた奥さんたちのことを忘れることができずにいるうちに、もはや年老いたので、これこれこういうことで、若い時にひどい目にあった女だということを、息子たち、娘たちに教えた。

---

[43] 註３では epuni となっていることに注意。ここで epunpa となっているのは、主語が「娘たち」で複数だからという説明になると思われるが、そうすると、この動詞は他動詞でありながら主語の単複に対応して変化するということになる。そのような動詞は eramuan－eramuoka「～を理解する」のように他にも存在するが、eramuan の場合は、変化する部分の an －oka が自動詞語根であり、その主語にあたる ramu「心」が、動詞全体の主語の数を反映しているのだと説明できるが、語根自体が純然たる他動詞である puni－punpa の場合は同じように説明することは難しい。

[44] この個所だけは aresikup ではなく、arisukup という白沢氏の説明に近い形に聞こえる。註３５参照。

"[iteki turepta kusu ne na][45] iteki puyne turepta kusu ne na[46]." sekor an pe a=ye kor onne katkemat a=ne ruwe ne kusu, [a=eysoytak] patek a=kopepka[47] p ne kusu, patek a=eysoytak kor an=an ayne onne katkemat a=ne ruwe ne kusu, a=eysoytak na って katkemat itak したって

「けっしてひとりではウバユリ掘りに行くなよ」と言いながら年老いた女であるので、そればかりを苦労話として語りながら暮らしているうちに老いた女であるので、こう語ったのだと、奥さんが語ったと。

（なかがわ　ひろし・千葉大学教授）

---

[45] 「けっしてウバユリ掘りにいくなよ」というつもりだったのではなく、「一人では行くなよ」ということが言いたかったことだと考え、言い直しと判断した。

[46] よく考えると、大勢で行ったのに全滅してしまった話なのだから、この物語の教訓として「けっしてひとりではウバユリ掘りに行くなよ」というのは妙である。むしろ、父親から言われていたという「いつでも逃げだせるようにしておけ」という教訓の方が、この話にはふさわしい。もっとも、これはこの話というより、一般的な山菜取りの注意事項なのかもしれない。授業に参加していた千葉大非常勤講師の志賀雪湖氏の話では、静内ではウバユリを取りに行く時にはかならずふたりひと組で行けと言われているということである。ひとりで行くなということばかりでなく、たとえ三人で行ってもひとりがはぐれてしまうという話だそうだ。

[47] この kopepka は「～について苦労話として語る」という訳があてはまる。註３６参照。なお、静内には ikopepka と呼ばれるジャンルが認められ、志賀雪湖氏によると、苦労話に限らず自分の体験談を含む話だということである。